

平成 18 年度岩手県立総合教育センター

授業改善を図るための校内授業研究の 進め方に関する研究

- 「校内授業研究の進め方ガイドブック」の
作成と活用をとおして -

(第1報)

研究協力員

北上市立鬼柳小学校	教諭	佐々木	修
藤沢町立藤沢中学校	教諭	須藤	淳
県立花北青雲高等学校	教諭	佐々木	清人

岩手県立総合教育センター
教科領域教育室・情報教育室
夏井 敬雄 齊藤 義宏
谷木 啓恭 鈴木 敏彦

<目次>

研究目的	1
研究の方向性	1
研究の年次計画	1
本年度の研究内容与方法	1
1 目標	1
2 内容与方法	1
3 研究協力員	2
研究結果の分析と考察	2
1 授業改善を図る校内授業研究の進め方についての基本的な考え方	2
(1) 授業研究の重要性	2
(2) 校内授業研究の視点	2
(3) 校内授業研究の目的	3
(4) 校内授業研究で取り上げる内容	4
(5) 校内授業研究の方法	5
(6) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」について	6
(7) 授業改善を図るための校内授業研究の進め方の基本構想図	8
2 「校内授業研究の進め方ガイドブック(試案)」の作成	8
(1) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」作成と活用のねらい	8
(2) 「校内授業研究の進め方ガイドブック(試案)」の基本構成	9
(3) 「校内授業研究の進め方ガイドブック(試案)」	9
研究のまとめ	9
1 研究の成果	9
2 今後の方向性	9

【引用文献】

【参考文献】

研究目的

本県の教育の最重要課題である「学力向上」のためには、日々の授業が児童生徒にとって「わかる授業」となるよう、教員が力量を磨き授業改善に努めることが何よりも大切であり、そのためには、研修・研究の充実が必要である。特に各校で校内研修として取り組む授業研究は、児童生徒の実態に即して、日常的、継続的に授業改善に取り組むうえで、大変有効である。

本県でも、小・中学校を中心に、校内授業研究が盛んに行われており、教員の授業改善の力を高める場となっている。しかし、近年、授業研究会が感想の交流に終始したり、研究テーマに基づいた実証授業がその場限りで日常の教育活動に反映されなかったりして、授業改善につながらないなど、校内授業研究が十分に機能しなくなっている状況が見受けられる。

このような状況を改善するためには、各校の実態に応じた校内授業研究の進め方の視点を示したり、そこで活用できるシートを作成し活用を図ったりするなど、評価・分析の視点を明確にした具体的な授業の振り返りができるようにし、そこで得た気づきを授業改善につなげていくようにする必要がある。

そこで、この研究は、「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成と活用をとおして、教員が授業の評価・分析を協力しながら行う校内授業研究の進め方について明らかにし、授業改善に役立てようとするものである。

研究の方向性

教師一人一人が授業改善を図るための校内授業研究は、どうあればよいのかということについて明らかにし、校内授業研究の進め方の視点や具体的な方策、留意点等についてまとめる。それらを実践をとおして吟味・検討し「校内授業研究の進め方ガイドブック」として提示することとする。

研究の年次計画

- 1 第1年次（平成18年度）
 - (1) 授業改善を図る校内授業研究の進め方についての基本構想の立案
 - (2) 「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」の作成
- 2 第2年次（平成19年度）
 - (1) 研究協力校（小学校、中学校及び高等学校）における校内授業研究の改善にかかわる実践
 - (2) 実践結果の分析・考察
 - (3) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成
 - (4) 研究のまとめ

本年度の研究内容与方法

1 目 標

授業改善を図る校内授業研究の基本的な考え方について、先行研究や参考文献を基に明らかにするとともに、「校内授業研究ガイドブック（試案）」を作成する。

2 内容与方法

- (1) 授業改善を図るための校内授業研究の進め方についての基本的な考え方の検討及び基本構想の立案（文献法）

(2) 「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」の作成（文献法）

研究結果の分析と考察

1 授業改善を図る校内授業研究の進め方についての基本的な考え方

(1) 授業研究の重要性

授業研究は、我が国では明治初期から行われてきた伝統的な教師文化である。本県においても、校種を問わず多くの学校や研究団体等で、子どもにとって「わかる授業」となるよう授業研究が熱心に行われている。

学校で行われている授業研究の方法は、校内で研究主題を掲げ、仮説を設定し、それを教師が授業において具体化して研究を進める「仮説・検証型」が大部分を占める。

本県の授業研究の仕方を校種別に見てみると、小学校では、研究主題を教科等で絞り（例えば「小学校国語科読むことの領域において～」）、研究会を教師全員で行い研究を進めていくスタイルが多い。中学校では、教科担任制ということから、どの教科等にも当てはまる研究主題を設定し、研究会を教科担任団（教務主任や研究主任、管理職が入ることも多い）で研究を進めていくスタイルが多い。高等学校では、校内で研究主題を掲げ研究を進めているところはあまりなく、個人或いは個人が所属する外部の研究団体で研究を進めることが多い。

多くの学校で行われている授業研究であるが、授業研究会が深まらない、授業研究を行ってはいるが成果がいまひとつ上がらない、授業改善に結び付かない、授業研究会の回数が少ない等の指摘がある。すなわち、授業研究がうまく運営できていない状況がある。こうしたとき、授業改善に結び付く授業研究はどうあればよいのかということ問い直し、その具体的な進め方等を提示していくことは、本県の最重要課題の学力向上に資することであると考える。

本研究においては、小学校や中学校、高等学校等すべての校種において、校内で行う授業研究（本研究ではこれを「校内授業研究」と言う）を対象として、研究を進めていく。

(2) 校内授業研究の視点

ドナルド・ショーンは、現代の専門家は「活動過程における省察」を原理とする「反省的実践」において専門性を発揮していると主張した。佐藤（1996）の文献から「反省的実践」について述べた部分を引用する。「『技術的実践』が、どんな状況にも有効な科学的な技術と原理を基礎とするのに対して、『反省的実践』は、経験によって培った暗黙知を駆使して問題を省察し、状況と対話しつつ反省的思考（デューイ）を展開して複雑な状況に生起する複合的な問題の解決にクライアント（顧客）と連帯して取り組むという。この『反省的実践』の様式を教育に導入したのが『反省的授業（reflective teaching）』である。『反省的授業』は、授業に関する一般化された科学的原理やプログラムを教室に適用する『技術的実践』としての授業に対抗する概念であり、教室の『出来事』に対する洞察と省察と反省という教師の『実践的認識』を基盤として成立する授業を意味している。」

「反省的実践」と「技術的実践」という視点から、各学校の校内授業研究を見つめる。校内授業研究会において、仮説を具体化した指導が協議的となる場合は、「技術的実践」に当てはまると言えよう。一方、仮説にかかわらない特定場面における特定の子どもについての教師のかかわり方が協議的になる場合があるが、このようなことは「反省的実践」に当てはまると言えよう。「技術的実践」は、どの教室にも通用する一般的な技術原理を探究し、「反省的実践」

は教室の中で起こった特有の出来事、その場の教師や子どもの活動・経験の意味を探究していくものである。

各学校の校内授業研究会の協議では、「技術的实践」と「反省的实践」の双方が取り上げられている。ただし、各学校は「仮説・検証型」で研究に取り組んでいることが多いため、協議は「技術的实践」の部分がクローズアップされている。また、研究紀要や研究通信等でも「技術的实践」中心にまとめられることが多い。しかし、「技術的实践」としての授業の限界が指摘されていることから、「反省的实践」の視点からの授業の分析・検討、まとめ等が必要である。

本研究においては、「技術的实践」と「反省的实践」の双方の視点をもった校内授業研究の進め方について検討していく。

(3) 校内授業研究の目的

吉崎(1997)は、授業研究の目的を「授業を改善する」「教師の授業力量を形成する」「授業についての学問的研究を進展させる」の三つとし、これらは相互に重なり合っていることが多いと述べている。

木原(2004)は、吉崎の分類のうち、「教師の授業力量の育成」を支柱にして、【図1】のように構造化している。現在その手法が提唱され実施されている「授業リフレクション」や「授業カンファレンス」などの授業研究をみても、今日の授業研究の在り方は、教師の授業力量を形成することを重要視していると言える。

一方、県内の各学校や研究団体等で行われている授業研究のほとんどは、授業改善と教師の授業力量の育成の二つを重要視して行われている。三つのことが相互に関連し合っていることと、本県の各学校が重要視していることを考え併せると、【図2】のようにとらえることができる。

三つのことは相互に関連しているものの、教師が自らの、或いは他の教師の授業を対象化し、分析・検討を加え、授業改善や学問的研究の発展につなげていくための力量が基盤であるにとらえる。「学問的研究の発展」は、専門的研究機関との連携によるものであり、本県の各学校の校内授業研究の目的を考えたとき、「教師の授業力量の形成」と「授業改善」が一般的である。

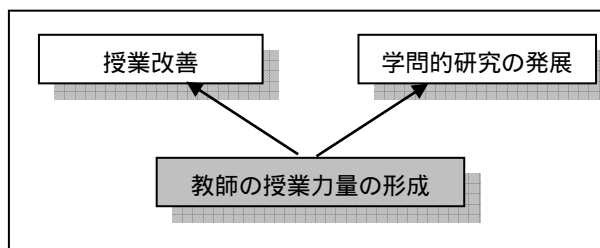
そこで、本研究においては、校内授業研究の目的を次のようにとらえる。

授業という事例を対象化して、それを分析・検討し、その研究をとおして教師の専門的な授業力量の発展を図るとともに、授業改善に結び付けること。

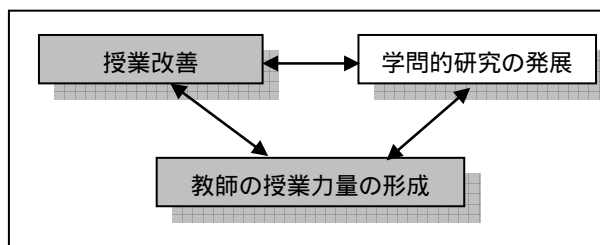
(4) 校内授業研究で取り上げる内容

授業力量の向上を図り授業改善に結び付けるための校内授業研究において、取り上げる内容を先行研究・参考文献等から洗い出してみる。

佐藤(1996)は、授業研究において検討すべき課題が成立する領域を【表1】のように「教師」



【図1】授業研究の3つの目的の関係(木原)



【図2】授業研究の3つの目的の関係(本県の場合)

「子ども」「教材」「学習環境」の四つの関係の組み合わせとしている。このマトリクスからは 10 の課題領域が成立する。

【表 1】実践的研究の課題領域のマトリクス

	教師	子ども	教材	環境
教師				
子ども				
教材				
環境				

例 「教師・子ども」の領域
 (教師と子どもの関係、教師の子ども理解、
 子どもの教師理解、子どもへの対応、発問
 と指示の技術、個別指導と一斉指導など)

吉崎(1997)は、授業力量を三つの側面から捉えており、整理すると【表 2】のようになる。

【表 2】授業力量を捉える三つの側面

授業力量を捉える三つの側面	具体的な内容
授業についての信念(価値観)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業観 ・ 教材観 ・ 指導観など
授業についての知識	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材内容についての知識 ・ 教授方法についての知識 ・ 生徒についての知識 ・ 教材内容と教授方法についての知識 ・ 教材内容と生徒についての知識 ・ 教授方法と生徒についての知識 ・ 教材内容、教授方法、生徒についての知識
授業についての技術	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業設計に関する技術 ・ 授業実施に関する技術 ・ 授業評価に関する技術

東京都教育委員会(2004)では、【表 3】のように「授業力」を六つに整理している。

【表 3】授業力のとらえ

使命感、熱意、感性・・・豊かな感性を身に付け、教員の職責を自覚し、困難な状況・課題に挑む姿勢。 児童・生徒理解・・・一人ひとりの児童・生徒を大事にしようとする愛情。 統率力・・・児童・生徒の集団をまとめ、リードする力。児童・生徒を惹きつける力。 指導技術(授業展開)・・・「わかる授業」「もっと学習したくなる授業」を実現する技能。 教材解釈、教材開発・・・教科や関連する学問等に関する深い識見。 「指導と評価の計画」の作成・改善・・・常に良い授業を求めていく、改善の意欲。

岩手県教育委員会(2006)では、「授業力ブラッシュアッププラン」における授業研究の際の視点を【表 4】のように整理している。

【表4】授業力ブラッシュアッププラン授業改善シート

	項 目	5段階評価				
		1	2	3	4	5
1	授業の目標が明確である。					
2	発問、指示、助言が明確・的確であり、児童生徒の志向や活動を促している。					
3	板書事項が精選され、学習過程や授業構造が明確な板書になっている。					
4	一斉、グループ等、思考を深めたり、表現力の育成を図ったりするために、目的に応じて学習形態を工夫している。					
5	「重要事項の記録」「考えをまとめる」「習熟を図る」等のノート指導を適切に行っている。					
6	提示資料や教材・教具の使用目的が明確で、児童生徒の実態にも合っている。					
7	児童生徒の学習状況をとらえ、それに則して進度の調整や個に応じた指導の配慮をしている。					
8	児童生徒の主體的な学習態度を育てる工夫をし、積極的に授業に参加させている。					
9	家庭学習についての指示（内容・手順など）を具体的に行っている。					
10	評価規準を作成するだけでなく、評価場面、評価方法を考え授業を行っている。					

上記の「実践的研究の課題領域のマトリクス」「授業力量を捉える三つの側面」「授業力のとらえ」「授業力ブラッシュアッププラン授業改善シート」で見るとおり、校内授業研究において取り上げる内容は多岐にわたる。

本研究においては、校内授業研究において取り上げる内容を、岩手県の望む教師像や実際の授業場面において具体的に発揮されるもの等を考慮し【表5】のように整理する。これは、校内授業研究において、発展させる教師の授業力量や、授業改善の視点ととらえる。

【表5】校内授業研究において取り上げる内容

視 点	具 体 的 な 内 容
教育に対する姿勢	使命感 熱意 教育観 等
授業構想	教材解釈 教材・教具開発 授業計画 評価計画 環境構成 等
学習集団マネジメント	児童・生徒理解 統率力 人間関係構築力 学習意欲の喚起 等
指導法	授業実施に関する技術（発問 板書 学習形態 発言への対応等） 指導と評価の一体化 環境構成 等

(5) 校内授業研究の方法

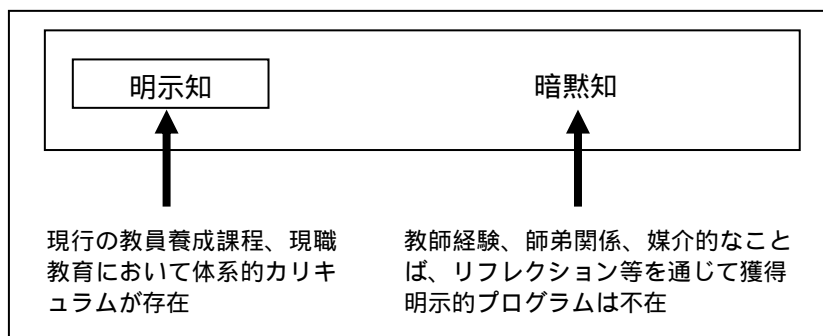
県内の各学校の校内授業研究におけるまとめは、研究紀要として、設定した研究テーマや仮説についてまとめられていることが多い。ところが、教師一人一人の授業改善がどうなされたのか、また、授業力量がどのように発展したのかについては、ほとんどふれられていない。言い換えると、「技術的实践」についてはまとめられるが、「反省的实践」についてはふれていない状況が多い。一人一人の授業改善や授業力量の「反省的实践」にかかわることは、教師個人にまかされているのである。「反省的实践」について、校内授業研究の中に位置付けられるとともに、計画的に取り扱われ協議され、まとめられていく必要がある。

授業研究会のもち方では、提案授業に対して参観者が質問や意見、助言等を行う形式が多い。ここで問題となるのが、出される発言が、社交辞令的な賛辞や単なる感想に終始してしまうということである。また、授業者と参観者の関係にも問題点がある。授業者は参観者からの意見や助言を甘受する立場であることが多いということである。授業研究会において、得られるものがなかったり、一方的に意見や助言を甘受する立場であったりしたならば、授業者になることを避けたいのは当然のことである。「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点をもちながら、すべての教師が協議に参加し、対等の立場で多様に学び授業力量を発展させていく授業研究会の方

法を工夫していく必要がある。

千々布（2005）は、教師の力量形成を暗黙知の視点から考え、教師の力量形成過程における暗黙知獲得戦略論のイメージを【図3】のように示している。

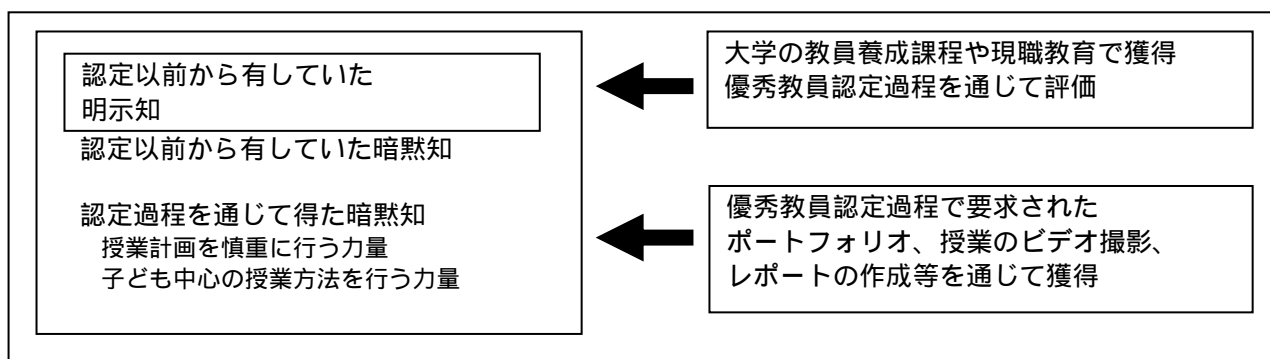
千々布は、暗黙知は言葉では伝達できず、教師自らの経



【図3】教師の力量獲得のイメージ

験や先輩教師との交流、媒介的なことばを通じた直感、リフレクション等を通じて獲得できるであろうが、多くの場合、無自覚的なものである、としている。そして、米国での優秀教員認定制度にふれ、認定者が認定過程を通じて力量形成が図られたとしてそのイメージを【図4】のように解釈し、「この力量形成仮説に従うならば、教師の力量のうち、子どものより深い理解や授業の洞察力など、明示的に語るができない暗黙知が、ポートフォリオの作成や授業のビデオ撮影など、授業そのものに即した記録の作成を通じ、自らの実践を振り返ること（リフレクション）を通じて獲得されていると解釈することもできよう。」と述べている。

そこで、本研究には、先に【表5】で示した視点において、明示的に語ることのできない暗黙的な教師の力量についても獲得できるよう、授業研究の進め方を工夫していかななくてはならない。



【図4】優秀教員認定過程を通じて獲得されている力量形成イメージ仮説

(6) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」について

ア 「校内授業研究の進め方ガイドブック」とは

本県における校内授業研究の現状から、小学校では批判的な同僚性の構築が、中学校・高等学校では、教科の壁を越えて校内授業研究を行う環境づくりが主な課題といえる。また、これまでの研究推進では「反省的实践」の視点があまり意識されてこなかった。加えて、教師の授業力量にかかわる「暗黙知」の獲得方法が示されなければならないという問題提起がある。

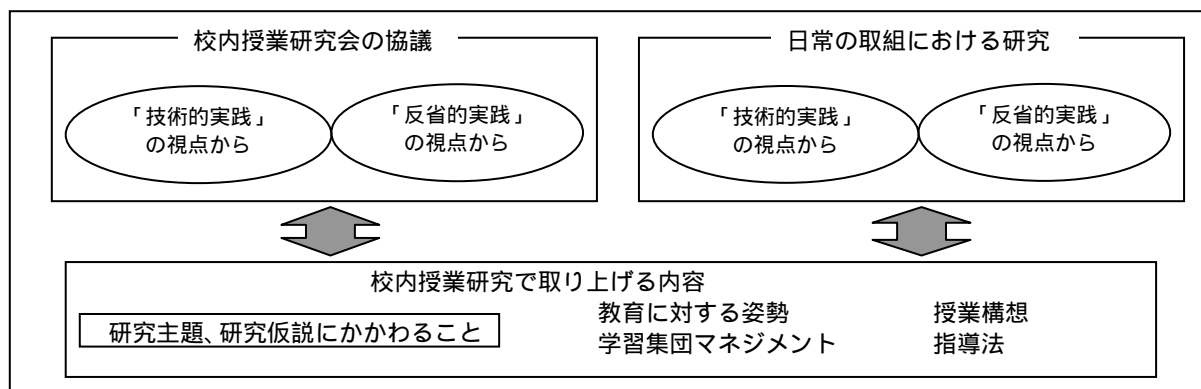
「校内授業研究の進め方ガイドブック」とは、これらのことに応えるものである。内容は、小学校、中学校、高等学校等のすべての学校を対象とし、教師の授業力量の発展や授業改善を促進することを目的として、校内授業研究の進め方の視点や、そこで活用できるシート、校内授業研究会の行い方等を提示していく。もちろん「校内授業研究の進め方ガイドブック」は、研究の一手法の提案という位置付けであり、唯一絶対のものではない。

イ 「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点

校内授業研究会の協議では、5頁の【表5】で示した内容が取り上げられることになる。例えば、提案授業の中での発問について協議されているとする。そこには「技術的实践」と「反省的实践」の二つ視点が存在する。指導案上に示してあるあらかじめ考え吟味された発問の在り方についての検討・協議は、「技術的实践」に該当する。一方、実際の授業中に教師が子どもの様子を見ながら予定の発問を変えて発問したり、指名の順番をそのときの状況で替えたりしたことについての検討・協議は、「反省的实践」に該当する。「技術的实践」の視点では、学校の研究仮説等に則り、どの教室にも通用する一般的な技術原理を探究することになる。「反省的实践」の視点では、教室の中で起こった特有の出来事、その場の教師や子どもの活動・経験の意味を探究することになる。

「反省的实践」については、校内授業研究の提案授業だけではなく、日常の授業や学級経営等における取組からも、振り返りまとめることができるような方法を提案していく。

上記のことを図に表したのが【図5】である。



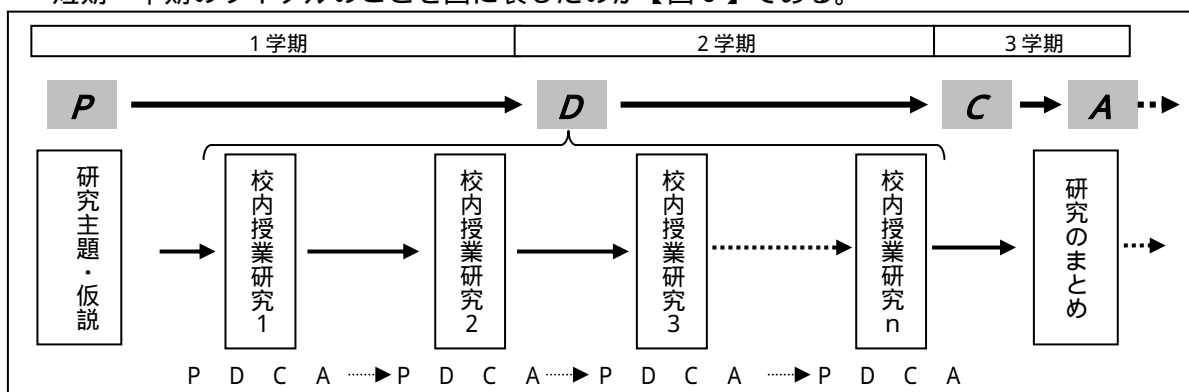
【図5】「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点

ウ P D C A サイクルによる計画的推進

年間数回行われる校内授業研究会を、P D C A サイクルにより実施する。ここでは、これを短期サイクルと呼ぶこととする。短期サイクルの「P」は、授業構想にあたり、教材研究や指導案作成等がその内容となる。「D」は提案授業の実施にあたる。「C」は校内授業研究会にあたる。「A」は事後の反省にあたる。この「A」を基に、次の提案授業が構想されることになる。

次に、一年を中期サイクルとして、そこにもP D C A サイクルを当てはめる。そして、数年間を見通したサイクルを長期サイクルとして位置付ける。短期・中期・長期のサイクルで目標を設定することにより、計画的な校内授業研究の推進が可能になる。

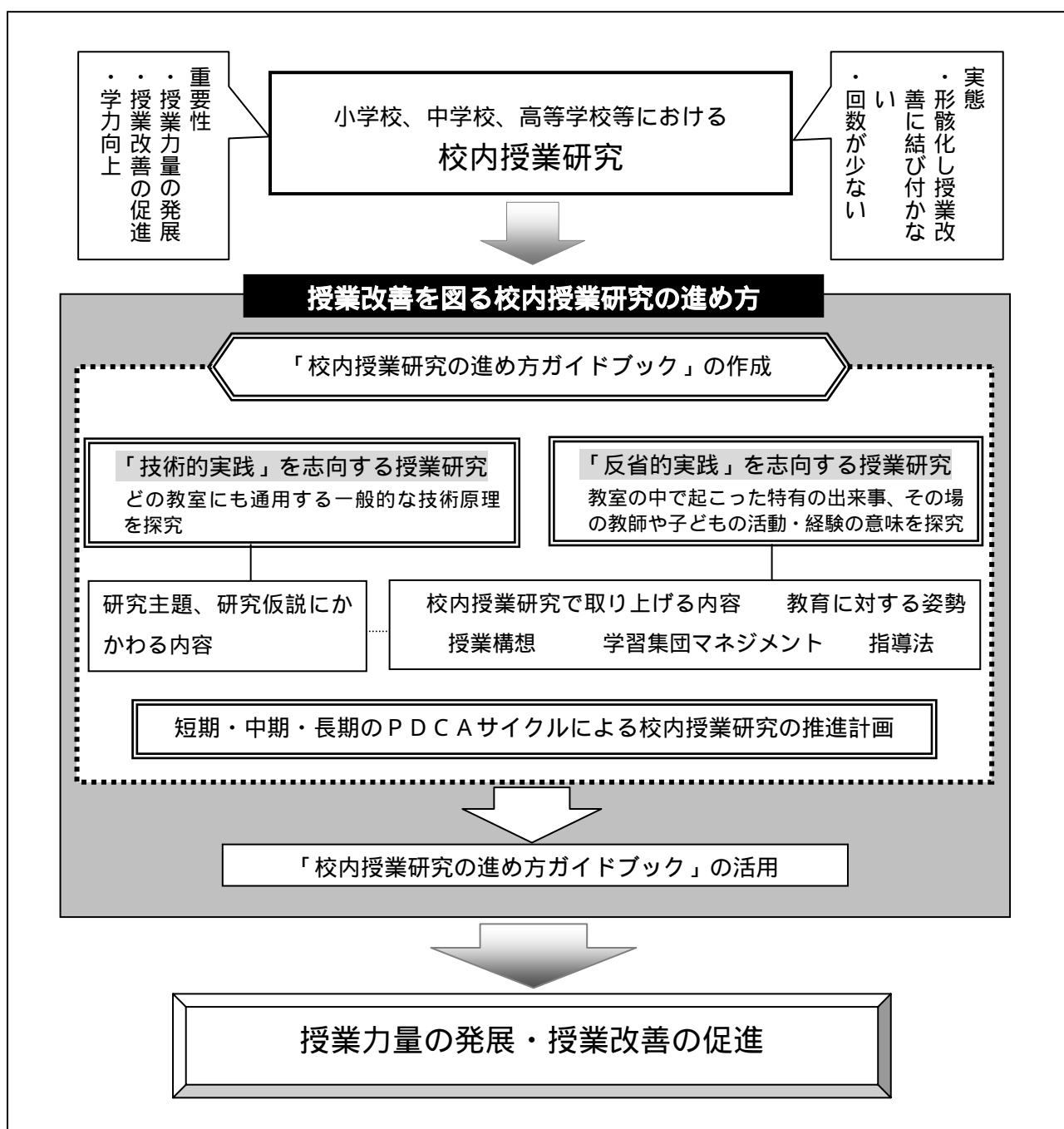
短期・中期のサイクルのことを図に表したのが【図6】である。



【図6】P D C A サイクル

(7) 授業改善を図るための校内授業研究の進め方の基本構想図

これまで述べてきたことを基に、【図7】のように基本構想図としてまとめた。



【図7】授業改善を図るための校内授業研究の進め方の基本構想図

2 「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」の作成

本年度は、「校内授業研究ガイドブック（試案）」を作成することとする。次年度において、この「校内授業研究ガイドブック（試案）」を基に、研究協力校での実践をとおして修正・改善を図り、「校内授業研究ガイドブック」として提示する。

(1) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」作成と活用のねらい

授業力量の発展と授業改善を図る観点からとらえた、校内授業研究の進め方の要点やそこで活用できるシート等を示すことにより、各学校の校内授業研究を進めるシステムづくりに役立てるとともに校内授業研究の活性化を図る。

(2) 「校内授業研究ガイドブック（試案）」の基本構成

先に述べた基本的な考え方と参考文献等を基に、「校内授業研究ガイドブック（試案）」を次のような観点と主な内容で構成する。

【表6】「校内授業研究ガイドブック（試案）」の基本構成

観 点	主 な 内 容
校内授業研究の推進計画の立案	・校内授業研究とは ・校内授業研究推進計画の立て方 ・機能的な組織づくり ・校内授業研究の種類とその方法 ・校内授業研究を充実させるための校外研修等の在り方
授業構想の仕方	・教材研究の仕方 ・児童・生徒理解の仕方 ・指導案の作り方 ・指導技術について
校内授業研究会の進め方	・効果的な校内授業研究会の行い方 ・授業者・参観者の留意点
校内授業研究のまとめ方	・校内授業研究のまとめ方の方法 ・校内授業研究の評価・改善計画

作成の際の留意点は、以下のとおりである。

ア 校種による現状や課題等の違いに合わせ、過重な負担がかからずに取り組むことができるような手法やシート等の具体物を提示する。

イ 「振り返り」と「気づき」、「共有」の視点を重視し、学校としても教師個人としても成果と課題、改善策を明らかにできるようにする。

(3) 「校内授業研究ガイドブック（試案）」

上記【表6】に示す基本構成で作成した「校内授業研究ガイドブック（試案）」の中の一部を、【資料1】と【資料2】で提示する。

研究のまとめ

1 研究の成果

2年次研究における第1年次の本研究成果の概略は、次のとおりである。

(1) 授業改善を図る校内授業研究の進め方についての基本的な考え方では、先行研究を基にしな
がら、以下のことをおさえることができた。

- ・校内授業研究の視点として、「技術的実践」と「反省的実践」の2つの視点をもちながら進めること
- ・校内授業研究の目的として、「教師の授業力量の向上」と「授業改善の促進」の2点を支柱とすること
- ・校内授業研究において取り上げる内容を、「教育に対する姿勢」「授業構想」「学習集団マネジメント」「指導法」とおさえること

(2) 基本的な考え方や先行研究等を基にして、「校内授業研究ガイドブック」作成の方向性をつかむことができた。

2 今後の方向性

2年次の研究では、本年度作成した「校内授業研究ガイドブック（試案）」を基に、研究協力校での実践をとおして、授業改善を図る校内授業研究の進め方を実践的・事例的に究明していく。

I 校内授業研究の推進計画の立案

1 はじめに



校内授業研究の目的は

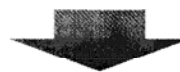
授業という事例を対象化して、それを分析・検討し、その研究をとおして教師の専門的な授業力量の発展を図るとともに、授業改善に結び付けることです。



「授業力量の発展」「授業改善の促進」のための視点

- ◆校内の研究主題・研究仮説にかかわること
- ◆教育活動全般にかかわること

視 点	具 体 的 な 内 容
○教育に対する姿勢	使命感 熱意 教育観 等
○授業構想	教材解釈 教材・教員開発 授業計画 評価計画 環境構成 等
○学習集団マネジメント	児童・生徒理解 統率力 人間関係構築力 学習意欲の喚起 等
○指導法	授業実施に関する技術（発問 板書 学習形態 発言への対応等） 指導と評価の一体化 環境構成 等



校内授業研究を充実させるために

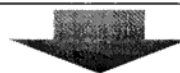
小学校では

- 批判的同僚性の構築を！
・本音で言い合える関係づくり
- 研究会のもち方の工夫を！
・協議の柱の明確化
・ワークショップ型の導入



中学校・高等学校では

- 授業研究のシステム・組織づくりを！
・授業研究会を年間計画に位置付ける
・教科の壁を越えて授業を見合う研究グループづくり

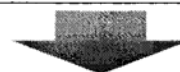


校内授業研究会をとおして

○学校全体、グループで

日常の教育実践をとおして

○教師個人、グループで



成果と課題を明らかにし、積み重ねる工夫を！

Ⅲ 効果的な校内授業研究会の行い方



研究会の課題に次のようなことが挙げられています。

- ・一部のしか発言しない。
- ・社交辞令的な発言が多い。
- ・成果と課題が明確にならない。

このことに応えるために、

ここでは、**ワークショップ型**の研究会の方法を紹介します。

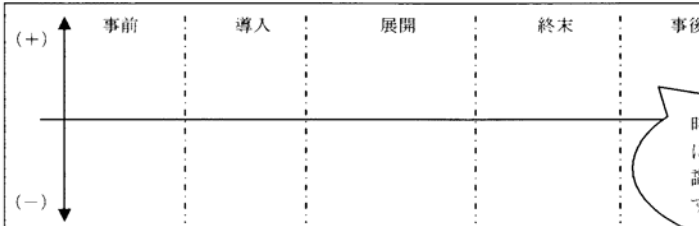
- 1 各自が、提案授業についての成果と課題を付箋紙に書き出しておきます。

- ・ピンクの付箋紙：成果
- ・ブルーの付箋紙：課題、質問したいこと
- ※研究会が始まる前に記述しておくといでしょう。

- 2 ワークシート上でKJ法による構造化を行います。



〈ワークシート例1〉授業を時系列で表したシート



模造紙
に作成

時系列に作成することにより、学習過程を意識しながら授業を概観することができます。

- ・付箋を紹介し合い、似たものを集めます。
- ・同じ内容のまとまりに、小見出しをつけます。
- ・小見出しを概観し、成果と課題を整理します。
- ・完成したワークシートを基に、発表内容をまとめます。

この働きかけで、子どもの学びが活発になったよね。



- 3 グループごとにワークシートを示しながら発表します。

- 4 全体協議で、成果と課題を共有化します。



- ・グループの発表を全体で聞き合い、共有化を図ります。
- ・成果と課題は、①「研究主題・研究仮説にかかわること」、②「その他のこと」の二つの視点からまとめるとよいでしょう。
- ・ワークシートを写真に記録しておいたり、みんなの目にふれるところに掲示しておいたりするとよいでしょう。

【引用文献】

- 稲垣忠彦・佐藤学（1996）,『子どもと教育 授業研究入門』,岩波書店, p. 86, p. 116
岩手県教育委員会（2006）,『授業力ブラッシュアッププラン授業改善シート』
木原俊行（2004）,『授業研究と教師の成長』,日本文教出版, p20
東京都教育委員会（2004）,『東京都公立学校の「授業力」向上に関する検討委員会報告書』
千々布敏弥（2005）,『教師の暗黙知の獲得戦略に関する考察』,国立教育政策研究所紀要, p117, p124

【参考文献】

- 伊藤功一（1990）,『教師が変わる 授業が変わる 校内研修』,国土社
岩崎奈緒美（2004）,『授業改善につながる授業研究を - 「教師による授業評価」に焦点を当てて - 』,
滋賀県総合教育センター
岡山県教育センター（2006）,『教育活動の改善に役立つ校内研究の手法に関する一提案』
尾木和英編著（1999）,『新版 校内授業研究事典』,ぎょうせい
神奈川県立総合教育センター（2005）,『校内研修ハンドブック』
川村雅弘編著（2005）,『授業にいかす教師がいきる ワークショップ型研修のすすめ』,ぎょうせい
佐藤学（2006）,『学校の挑戦 学びの共同体を創る』,小学館
千々布敏弥（2005）,『日本の教師再生戦略』,教育出版
ドナルド・ショーン / 佐藤学・秋田喜代美訳（2001）,『専門家の智慧 反省的实践家は行為しながら考える』,ゆるみ出版
橋本吉彦・坪田耕三・池田敏和（2003）,『Lesson Study 今、なぜ授業研究科か - 算数授業の再構築 - 』,東洋館出版社
広島県教育委員会（2002）,『授業改善のための校内研修ハンドブック』
マイケル・ポランニー / 佐藤敬三訳（1980）,『暗黙知の次元』,紀伊国屋書店
横浜市教育センター（2005）,『授業力向上の鍵～横浜の新たな授業研究～』
吉崎静夫（1997）,『デザイナーとしての教師 アクターとしての教師』,金子書房